

四十五通のたからもの

長崎 心遙

「足なんてなくても、こつちゃんの笑顔が大きい！」

私が下を向くと、とっさにはーちゃんは言ってくれる。

二年生の冬、朝起きると、とつぜん下半身が動かなくなった。そして病院に運ばれた時には、手も足も身体も全く動かさなくなっていた。原因不明の病気で、自分で自分の、脳やせきずいをこうげきする病気だ。薬も治りよう法もないとつけられた。

初めての入院生活は、わくわくしていた。お友達が手紙やプレゼントをくれて、一日中お母さんと二人で病室ですぐすことができたからだ。千羽づるもたくさんもらえてなんてラッキーガールなんだろうとさえ思えた。

お母さんは私の前では笑っていたけれど、朝起きるといつも目は真っ赤にはれていた。お父さんは動かない足をさすってくれるけど、時どき足をギュツとにぎりしめて、私の足をにらみつけた。だんだん、私は、下ばかり向いて動かない足を見つめる日が続いた。

そんな時、はーちゃんが私たちが手をつないで一りん車をしながら笑っている絵手紙をくれた。私たちはサンタさんから色かがいの一りん車をプレゼントしてもらい、いっしょに練習していた。私がいけない間はーちゃんはずっとその練習を待っていてくれたのだ。

リハビリのこう果もあって私は立つことができるようになり、また自分の足で歩けるようになった。お医者さんは目をまん丸に開けて私を見つめ、お母さんは生まれたての赤ちゃんのように声を上げて泣いた。きせきが起きたのだ。またはーちゃんと学校に行ける、また一りん車にのれると心がはずんだ。

ところが、歩けるけれど足が重くて動かせない。一りん車もうまく乗れない。はーちゃんとかくらべるとできないことがどんどん増えていった。もうはーちゃんとは会いたくないと思ふ日もあった。ある日、別のお友達と歩いて帰る時、私は同級生と同じスピードで歩くことができなかった。その時、はーちゃんは、私に合わせてゆっくり歩いてくれてたんだと気づいた。

私は病気の後いしうで、うまく歩けないし、うまくしゃがむこともできない。トイレだつてうまくできない。でも、はーちゃんのおかげで私のできないという、バリアがかい放されたのだ。

一生車いす生活と言われた私に、入院中四十五日間、毎日手紙をくれてありがとう。はげましてくれてありがとう。

「どんなときでもやさしいはーちゃんが大好き！」

今度は私が伝えたい。私も、こまっている人がいたら手助けすることで、心のバリアフリー社会を实げんさせたい。